亡びゆく森

小島烏水

青空文庫

伊勢山から西戸部の高地一帯（久保山を含んで）にかけて、昔は、可なりに深い森林があつたらうと思はれる、その俤（おもかげ）の割合に保存されてるのは、今私の住居してゐる山王山附近である、もとよりこれぞといふ目ぼしい樹木もなく、武蔵野や相模原に、多く見るやうな雑木林で、やはり楢（なら）が一番多く、栗も樫（かし）もたまには交（まじ）つてゐる。

この頃のやうな若葉時になると、薄く透明な黄味を含んだ楢の葉が、柔々しい絹糸のやうな裏毛を、白く光らせて、あつちでも、こつちでも、ひら〳〵と波頭のやうに、そよ風に爪立つてゐる。傍に近寄つて見ると、土の匂ひのしさうな、黒ツぽくて浅い裂け

目のある、無格好の幹から、滑ベツこい灰白の小枝が、何本も出て、その小枝からは、鮮やかな薄緑の葉が、掌(てのひら)を返すやうに、取ツ組み合つて密集してゐる、同じ楢の中でも、私は殊にコナラの葉を美しいと思ふ、先の尖(とが)つた篦(へら)形の葉の縁辺を、鋸(のこぎり)の目立のやうな歯と歯が内向きに喰い込んで、幾枚となく小さい掌を重ねたやうな若葉が、上になつたり下になつたりしてゐる戯れを、もどかしさうに見下して、黒松が大手をひろげて、虚空をぴたりと抑へつけてゐる、黒ツぽい程、濃緑の松の葉の傘は、大概楢よりも高く挺(ぬ)き上つて、光線を容易に透(とほ)しさうもなく、大空にひろがつてゐる、森の中をさまよひながら、楢の葉の大波を掻(か)き分けて行くと、方々にこの黒松の集団が、印度藍(インヂゴー)の岩壁のやうに突つ立

つてゐる、それが疎(まば)らの林を、怖ろしく厚ぼつたくも見せるし、又遠くからは、青空に黒く塊(かた)まつた怪鳥のやうにも見える。

春の宵は、森の中が寝静まつたやうにひつそりとして、青葉若葉の面が、霞がかゝつたやうに曇つて来る、冷たい、水のやうな、浅黄色の空は、下弦の月が黄金色に光つたときは、柔かい吐息が、あの銀色をした温味のある白毛の衾(しとね)から、すやすやと聞えやうかと耳を澄ます、五月雨(さみだれ)には、森の青地を白く綾取(あやど)つて、雨が鞦韆(ブラコ)のやうに揺れる、椽側(えんがは)に寝そべりながら、団扇(うちは)で蚊をはたき、はたきする、夏の夜など、遠い〳〵冥途(めいど)から、人を呼びに来るやうな、ボウ、ボウと夢でも見るやうな声が、こんもりした杉の梢から、あたりの空気に沁み透つて、うつゝともなく、幻とも

なく、神経にひゞく、「梟(ふくろふ)が啼(な)き出したよ」と、宅の者はいふ、ほんとうに梟であるか、どうか、私は知らないが、世にも頼りのなさゝうな、陰惨たる肉声が、黒くなつた森から濃厚な水蒸気に伝はつて、にじみ出ると、生活から游離された霊魂が、浮ばれずにさまよつてゐるのではなからうかと思はれて、私は大地の底へでも、引き擦(ず)り入れられるやうに、たゞもう、味気(あぢき)なく、遣(や)る瀬のない思ひになつてくる。

それよりも秋の夜は、箱根大山辺からの、乾(から)ツ風が吹き荒(すさ)んで、森の中の梢といふ梢は、作り声をしたやうに、ざわ〳〵と騒ぎ立ち、落葉が羽ばたきをしながら、舞ひ立つて、夜もすがら戸を敲(たゝ)き、屋根を這(は)ひずり廻る、風の無い夜は、朝起きて見ると、森の

中一杯に剣の光を含んだ霜が下りてゐる、その夕暮に、久保山の人焼く煙を、疎林の中の逍遥に見たこともある、秋の末から冬になると、何々谷戸といふ特種の部落に属する人たちの若い娘などが、落葉籠をしよつて薪を折りに、林の中をうろついてゐるのに出遇ふ。

私は中学校の裏から、久保山へ抜ける森の中の落葉道で、その一人にひよつくり遇つたことがある、継ぎ剥ぎ(はぎ)の衣物(きもの)ながら、頸(くび)から肩へかけて、ふつくらした肉の輪廓が、枯れ残つた櫨(はぜ)の赤い葉蔭に、うす暗く消えて、引き締つた浅黒い円味のある顔にパツチリとした眼が、物思はしげに見えた、無言で行き遇つて、無言で通り過ぎたが、ツルゲネフの少年時代に、森蔭で農奴(サアフ)の少女に、

髪の毛をいぢられたことを、四十年も後になつてから、生々と描いてゐることを憶ひ出した。

山王山から久保山に亘つて、森の中は静かではあるが、空気は冷たくない、森の戸を開けて入ると、地形がおのづと幾つもの室を作つてゐる、森の茂つてゐるところは、大概高地で、そこから落ち窪んだところは、池になり、畑になり、又谷戸にもなつてゐる、豚谷戸だの、乞食谷戸だのといふ綽名があつて、特殊の部落も、その窪地にある、かういふ部落が、新開港場の横浜にあるのは、珍しい、さうして下町の「文明人」よりは、彼等の方が、土地の草分けをした先入主人ではないかと思はれる。

彼等は森林で衣食こそしてゐないが、大概森林の蔭で、ジメ/

〳〵した、生活をしてゐる、今でも森の下道の、谷に落ち込んだところを瞰下(みおろ)すと、菜の花や青麦の畑が少し許(ばか)りあつて、その傍の一軒家には、風呂桶も置いてあれば、臼も転がつてゐる、森に人声がすると、飼犬がムヤミに吠(ほ)えたてる、さうして森の侵入者を追ひ返さうとしてゐる。

併し下町は、侵入者と侵入者が、鎬(しのぎ)を削つて、追ひつ追はれつ、入り乱れてゐる、電車線の一端が夕日に光つて、火に舐(な)められたやうに赤くなりながら、ずん〳〵森の中まで延(の)しかゝつて来た、戸部線の電車が、ビユウ〳〵呻(うな)り初めてからといふものは、死滅を宣伝する皺嗄(しやが)れ声が、森の方々から走つて、鋸や規尺を持つて入り込むものが、毎日殖(ふ)えて、森の中でも目ぼしい木は、鋭い利(と)

鎌で草でも薙ぐやうに伐り仆され、皮を剥がれ、傷つけられ、それから胴切にされてしまふ、今までは私の宅の周囲も、森林で厚肉の蒼黯い染色硝子を立てゝゐたが、一角だけを残して、殆んど全部が、滅茶滅茶に破壊された、亡び行く森の運命を予言して、引き留める袂を振りちぎつて、後を晦ました巫女のやうに、梟も何処へやら影を隠したと見え、啼き声も、一両年前から聞えなくなつた。

自然界にも怖るべき革命が来たのだ、森林といふ原始の自然は、今迄は此山王山を繞る外廓となつて、下町から来る塵埃を防いでゐた、烈しい生存競争から来る呻り声も、此森林の厚壁に突き当つては、手もなく刎ね返されてゐた、したが人間の生活といふ

濃厚な低気圧は、森の中を目がけて、面も振らずに突進する、森林の壁一重を隔てゝ、内には寺院があり、墳墓があり、孤児院と救護所があり、赤い旗を立てた、山桜の美しく咲く稲荷(いなり)がある、外には工場があつて、煙突から煙を吐き、自動車が臭い瓦斯(ガス)を放散して時には人を引き倒して、後をも見ずに駈け出す、芝居と、遊廓と、待合と、料理屋があつて、そこに、「悪の華」が咲いてゐる、森は動的生活と、静的生活を仕切る壁であつた。

私が山王山を知つてから、いづれも生活の敗残者であらう、この森の中で、首縊(くびくゝ)りが二人ばかりあつた、人目を避けるに、都合がいゝとは言ひながら、不思議なことに、死ぬ人は原始的に安息な自然を選ぶ、川や海に身を投げる人と森の中で縊(くび)る人と。

今となつてみると、新雪の輝やく富士山がよく見えぬからと言つて、出洒張(でしやば)つた杉木立の梢を恨(うら)んだのは、勿体(もつたい)ない気がする。

私は毎朝起きると、二階の戸を一二枚開けては、向ふの森を見る、樫の木は黄味の克(か)つた、薄赤い葉をつけて、枝が傘をひろげたやうに、丸くなつてゐる、杉の鮮やかな新芽は、去年ながらの黒く煙つたい葉の上に、青い珠(たま)を吐いてゐて、腕ツ節の強さうな、瘤(こぶ)だらけの黒松が、五六本行列はしてゐるもの丶、その木と木の間ががらんとして、森にあるべき茂味(しげみ)といふものがまるでない。

さうして、その空地や、新しく均(な)らされた土の上には、亜鉛屋根だの、軒燈だの、白木の門などが出来て、今まで真鍮(しんちゆう)の鋲(びやう)を打つたやうな星の光もどうやら鈍くなり、電気燈が晃々(くわうくわう)と

つくやうになつた。

どこを見ても家だ、人間だ、電線だ、塀だ、門だ、私の頭は楯で押されるやうな高圧力を感じてゐる、二階の書斎には、かういつた峻烈な空気を幾分か調停するつもりで、友人の描いた青々した信州高原の花野や、木曾の峡谷や、日本アルプスの万年雪などの水彩画をかけつらねてある、手作りの粗(あら)ツぽい書棚には、ラスキンの論文集、ツルゲエネフの小説、それから森林生活の聖老ソローの全集、コンラツドの海の文集、ラルフ・コンノルのスカイ・パイロツトのやうなものまで積み上げて、この窒素の多い空気の中から、強(しひ)ても酸性の呼吸をつかうとした。

前の晩に遅く帰つた、その翌(あ)くる朝のこと、起き上つて、いつ

もの通り、二階から森を見ると、急に薄ら寒くなつて、羽目板へ押しつけられるやうな気がした、風情のよかつた樫の木が、伐り倒されて、紅を含んだ水々しい葉が消え失せ、森は前歯を抜かれたやうに、ガランとしてゐる、さうして灰色の空が、鈍い白壁のやうに、間の抜けた顔をして、ぼうと立つてゐる、私の網膜には錯乱の影が映つた、もう残つてゐるものは、見る影もない松と杉が五六本あるばかりだ、その最後まで踏み留まつた戦士も、また〻く間に、塵埃に委することであらう、太古時代には、森林が人間を威嚇した、その復讐の旋律が、いま酬つて来るとともに、私の生活を、原始の自然に繋ぐ紐帯も、ズタズタに引きちぎられたのだ、人情の結氷点が近づいたのだ、曲もない白壁のやうな空

を見るために、森林を犠牲にしなければならなかつたのであらうか、私は眼かくしの革を取り去られたときの、馬の怯(おび)えを感じた、森と私の交感を妨げやうとするのは、眼に見えない侵入者だ、その胸倉を捉(と)つて、戸の外に突き出さなければ気が済まないやうに、ムシヤクシヤ腹になつて、二階の狭い 椽側(えんがは)に立ち上りながら、向ふを睨みつけ、体操をするやうな手つきで、虚空を二三度突つ張つて見た。

青空文庫情報

底本：「日本の名随筆21　森」作品社
　　1984（昭和59）年7月25日第1刷発行
　　1998（平成10）年1月30日第17刷発行
底本の親本：「小島烏水全集　第八巻」大修館書店
　　1980（昭和55）年10月発行
入力：門田裕志
校正：大野　晋
2004年11月4日作成
青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

亡びゆく森

小島烏水

２０２０年　７月１２日　初版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　http://aozora.xisang.top/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/